



【ジャパンメディカルリーグ趣意書】

世界的に猛威を振るってきた新型コロナウイルス感染症は、日本国内においてもいまだ収束の道筋は見えていません。世の中は閉塞感に包まれ、人々が抱く沈うつ感、重苦しきは2011年3月の東日本大震災の記憶とも重なります。そして、昼夜を問わず感染症と対峙する医療従事者の激務は苛烈を極め、いわれのない誹謗中傷や差別偏見にさらされることすらあると聞きます。

まさに国難とも形容されるような時代だからこそ、うつむきがちな人々に前を向かせ、笑顔と明るさを取り戻させたい——スポーツにはその力があると私たちは信じています。ジャパンメディカルリーグ(JML)大会は厳しい状況に置かれた医療従事者に常に寄り添う存在でありたいと切に願っています。

「スポーツを通じて医療従事者の心身を癒す」というこの大会の大義がこれほど説得力をもって世の中に響き渡る時は今をおいてないのではないのでしょうか。医療従事者がスポーツによってストレスを発散し医療の質が向上すれば、それは患者にとっても望ましいことです。スポーツに打ち込む医療従事者の雄姿は頼もしく映り、医療への信頼を一層高めてくれるに違いありません。

JML大会を主催する日本メディカルスポーツ協会の創設者で2019年5月に逝去した北島政樹先生(国際医療福祉大元副理事長)は、教育者としても後進の指導に情熱を注ぎました。先生がご存命だったら、コロナ禍に立ち向かう今の若手医師にどんな言葉を掛けたことでしょうか。がん治療に新たな地平を開いたロボット支援の腹腔鏡手術に象徴される最先端医療にどん欲に取り組みまれ、医学界を長く牽引した先生の喪失感はいまだ埋めがたく、その存在感は増すばかりです。

北島先生はライフワークとして「チーム医療・チームケア」の確立にも力を注ぎ、患者の療期やステージに合わせて構成する「日本型チーム医療」の構築を目指しました。そして、そのお考えは日本メディカルスポーツ協会の誕生につながります。私たちは一つの目標に向けチームの団結力を高める力があるスポーツに着目し、「One for all, all for one」(一人はみんなのために、みんなは一人のために)の精神を体現するため、JMLの開催を目指しています。つまり、JMLにはチーム医療をさらに深化させ、日本に根付かせたいという先生の熱い思いが息づいているのです。

母校である慶應義塾の創立者、福沢諭吉の言葉に由来する「未来のための今」を座右の銘としていた北島先生は、「未来へ向け、今何を為すべきか」ということ常に自問されていました。逆境に置かれた時こそ、新しいことに挑戦する価値があります。志半ばで逝った先生の思いを受け継ぎ、しっかり育て花開かせるのは私たち医療界にかかわる者の責務とは言えないでしょうか。

医療界を支える皆さん！ 私たちと一緒に未来のための一歩を踏み出しましょう。大会の趣旨にご賛同いただき、厚いご支援、ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。